

「恋する輪廻 オーム・シャンティ・オーム」 ☆
☆☆☆

2013（平成25）年3月20日鑑賞

<シネ・リーブル梅田>

監督：ファラー・カーン

オーム・プラカーシュ・マキージャー（売れないエキストラ俳優）／シャー・ルク・カーン

オーム・カプール（超人気俳優）／シャー・ルク・カーン

シャンティプリヤ（人気女優）／ディーピカー・パドゥコーン

サンディ（オーム・カプールの大ファン）／ディーピカー・パドゥコーン

ムケーシュ（売れっ子プロデューサー）／アルジュン・ラームパール

パプー（オーム・カプールの親友）／シュレーヤス・タラブデー

ベラ・マキージャー（オーム・プラカーシュ・マキージャーの母）／キラン・ケール

ラージェーシュ・カプール（オーム・カプールの父）／ジャーヴェード・シェイク
2007年・インド映画・169分

配給／アップリンク

<これぞポリウッド！歌、踊り、そして恋！>

ハリウッドの向こうを張って、年間1000本以上も製作されているポリウッド映画は歌、踊り、そして恋が満載！本作は2007年にインドで興行成績トップとなったポリウッド映画の最高峰だから、169分間にわたって歌と踊りが炸裂するうえ、邦題どおり輪廻がテーマとなっているところがミソ。

輪廻とは「輪廻転生」の輪廻のことで、邦画でも『魔界転生』（03年）がそれをテーマとした映画だった。『魔界転生』は島原の乱で敗れた天草四郎の他、荒木又右衛門、宝蔵院胤舜、宮本武蔵、柳生但馬守らの剣豪たちが魔界から転生し、柳生十兵衛と対決する面白いものだった（『シネマルーム3』310頁参照）が、さて本作の輪廻は？

<1970年代から2000年代へ「輪廻」！>

本作前半の主人公オーム・プラカーシュ・マキージャー（シャー・ルク・カーン）はエキストラ俳優である母親ベラ・マキージャー（キラン・ケール）のもとに生まれた、しがない脇役俳優。彼は、今をときめく大女優シャンティプリヤ（ディーピカー・パドゥコーン）に恋心を抱いていたが、それは所詮、高嶺の花。しかし、ある日オームが撮影現場で起きた事故からシャンティプリヤを救い出したことで2人は急接近していったが、何と彼女は売れっ子プロデューサーのムケーシュ（アルジュン・ラームパール）と結婚していたことを知って大ショック。さらに、そっとシャンティプリヤの後をつけたオームは、シャンティプリヤとムケーシュの口論を目撃。その中でシャンティプリヤがムケーシュの子供を身籠もっていることを聞かされて打ちのめされたが、シャンティプリヤの話を聞かされたムケーシュが喜ぶどころか、逆にシャンティプリヤを疎ましがり、彼女を亡き者にしようとしたから、さあ大変だ。

前半のクライマックスは、『風と共に去りぬ』（39年）前半のクライマックスでタラの町が燃え上がるのと同じように、巨大なスタジオが燃え上がり、その中に閉じこめられたシャンティプリヤが焼け死んでいくシーケンスとなる。もちろん、オームは必死にこれを救出しようとしたが、逆に彼も……。これにて本来は「ジ・エンド」だが、オーム・プラカーシュ・マキージャー死亡の日に、ラージェーシュ・カプール（ジャーヴェード・シェイク）夫妻の子供として生まれ変わったオーム・カプール（シャー・ルク・カーン）は30年後の今、大スターとしてポリウッド映画界に君臨していた……。

<インドには、こんなすごい美人が！>

オーム憧れの女優ながら、ムケーシュから疎まれて殺されてしまう本作前半における悲劇のヒロイン、シャンティプリヤを演じるディーピカー・パドゥコーンは本作が映画初出演の新人女優だが、顔立ちのハッキリしたすごい美人。インドには、こんなすごい美人がいるわけだ。こんな美人を前半だけで殺してしまうのはもったいないうえ、本作は輪廻をテーマとした映画だから、後半にはオーム・カプールの登場と共にこのディーピカーもすぐに何らかの役で登場するものと思っていたが、これがなかなか登場しない。後半は主としてシャー・ルク・カーンの「割れた腹筋」を誇示するようなディスコダンスのシーンや映画賞授賞式のシーンなど華やかな歌と踊りをメインにしてオーム・カプールの大スターぶりを見せつけてくれるが、なかなか美人女優ディーピカーの登場はない。

本作が「歌と踊りのポリウッド」らしからぬシリアスな復讐もの(?)の様相を見せるのはずっと後で、今やハリウッドの敏腕プロデューサーになっているムケーシュが久しぶりにポリウッドに戻り、オーム・カプールとのコラボの企画が始まってからだ。既に自分がオーム・プラカーシュ・マキージャーの輪廻で、2000年代の今、大スターとして君臨していることを悟ったオーム・カプールはムケーシュとのコラボによる新作映画の中で密かにムケーシュへの復讐を企てたが、そのためにはシャンティプリヤにそっくりな美人女優が不可欠。ところが、いくらオーディションをしても帯に短し、たすきに長し状態で困っている中、今、目の前に登場した新人女優サンディ（ディーピカー・パドゥコーン）を見ると……？

<これは是非、宝塚大劇場でも！>

『ベルサイユのばら』は今や宝塚のシンボリック作品となり、今なお形を変えて上演されているが、本作後半からクライマックスに至るストーリー展開はスリリングであるうえ、『オペラ座の怪人』（04年）（『シネマルーム7』156頁参照）におけるシャンデリアの落下シーンのようなハイライトシーンも登場するから、本作はまさに宝塚の大劇場にピッタリ。何度も登場する『オーム・シャンティ・オーム』というタイトルソングは耳にタコができるほど聴かされるから、一度本作を観ればバッチリ頭の中に入ってくるし、リズム感あふれる多くの曲は名曲ぞろい。ただダンスはあくまでインド風だから、これをいかに宝塚調に改めるかという課題はあるが、「輪廻」という大テーマの下に恋と復讐の要素を絡め、最後はハッピーエンドという構成はまさに宝塚歌劇にピッタリだ。

もしそうなれば、ディーピカー・パドゥコーンが演じる2つの役は、1985年に宝塚を退団し、映画『化身』（86年）で美しいヌード姿を見せてくれた黒木瞳のような可憐な美人女優を起用してくれば、もう最高！

2013（平